向坂逸郎文庫の図書・資料

吉田　健二

はじめに
1　外国語図書と外国語新聞・雑誌
2　日本語図書
3　堺利彦旧蔵書と「大逆文庫」
4　逐次刊行物――日本語新聞
5　逐次刊行物――日本語雑誌
6　原資料

はじめに

戦前は「労農派」の論客として日本資本主義の分析に健筆をふるい，戦後は社会主義協会の代表として日本におけるマルクスの研究と実践に大きな足跡を残した向坂逸郎は，愛書家としても知られ，生涯を通じて膨大な図書・資料を集めた。ちなみに向坂文庫の蔵書は，雑誌やパンフレット類を含めて７万冊に及ぶ。このうち日本語図書は１万5001タイトル・２万1390冊で，外国語図書は１万冊を超す。また逐次刊行物のうち，新聞と雑誌だけで日本語のものが3393タイトル，外国語のものが593タイトルとなっている。このほか，戦前日本の無産政党資料や戦後の日本社会党資料，総評・炭労など労働組合資料などかなりの量の原資料がある。いずれにしても，一個人の蔵書としては他に例をみないものだろう。

これら向坂逸郎の図書・資料は，1985（昭和60）年１月22日，氏が87歳で亡くなったのち，同年５月，ゆき夫人から一般公開を条件に寄贈された。当研究所では，これを「向坂逸郎文庫」として受け入れ，1986年４月以来，特別プロジェクト（責任者・若杉隆志）を組んで整理・分類作業に努め，これまで『向坂文庫目録　Ⅰ　日本語図書分類順』（1992年），『向坂文庫目録　Ⅱ　日本語図書索引』（1993年），『向坂文庫目録　Ⅲ　外国語図書』（1994年），『向坂文庫目録　Ⅳ　逐次刊行物』（1995年）の４冊を発行し，閲覧者の便宜をはかってきた。そして本年３月に，最終刊の『向坂文庫目録　Ⅴ　原資料』が刊行され，ここに向坂文庫の整理はひとまず終了した。

なお，向坂文庫について，筆者は先に「向坂文庫の所蔵図書・資料」と題する一文を『月刊社会党』第402号（1989年５月）に，また社会主義協会の機関誌『社会主義』に３回にわたって向坂文

庫の新聞と雑誌について連載した（第299，306，309号，1989年８月，1990年２月，同５月）。さらに二村一夫氏も「『向坂文庫』について」と題する詳細な紹介を，法政大学の広報誌『法政』第404号（1990年３月）で発表しておられる。関心のある方はあわせてお読みいただきたい。

１　外国語図書と外国語新聞・雑誌

向坂文庫の最大の特徴は何と言っても洋書，すなわち外国語図書にあるだろう。向坂文庫の外国語図書は約１万タイトルで，外国語の新聞と雑誌は593タイトルに及んでいる。研究所では寄贈を受けたのち７年余の歳月をかけて整理・分類を行い，補修なども試みて，1994年３月に前掲の『向坂文庫目録　Ⅲ　外国語図書』を刊行したのにつづき，1995年10月に『向坂文庫目録　Ⅳ　逐次刊行物』を刊行し，これに外国語の新聞と雑誌の全タイトルを収めた。この向坂文庫の外国語図書と外国語の新聞・雑誌については，これらの目録をご覧になっていただきたい。

さて，外国語図書はドイツ，イギリス，ロシア，アメリカ，中国，朝鮮など各国にわたっていて，そのジャンルも日本語図書と同じく経済学，経営学，政治学，法律学，哲学，社会思想，歴史学，社会学，文学，技術論，芸術学とじつに幅広い。

洋書を国別で見た場合，その大部分はドイツ語の文献である。このドイツ語の文献で何よりも注目されるのは，向坂が1922（大正11）年～24年のドイツ留学中にベルリンの古書籍商フーゴ・シュトライザントの店から購入したマルクス主義関係の文献であろう。向坂は留学中，二日とおかずシュトライザントの店に通い，第１次世界大戦後の猛烈なインフレのなか，「戦勝国」日本の通貨の力もあって，マルクス，エンゲルス，レーニンの著書を中心に，ルーゲ，ラッサール，プルードン，カウツキー，ヒルファーディング，ローザ・ルクセンブルク，プレハーノフ，メーリング，ベーベル，リープクネヒト親子など革命家の文献を大量に購入した。このとき大原社研では，櫛田民蔵につづき，森戸辰男もドイツに留学中で，研究所のため古典派経済学の図書や社会主義文献を買い集めていたのである。向坂はこれ以来，60数年にわたってマルクス主義文献を系統的に収集してきた。これらドイツ滞在中における文献収集については，向坂自身，「蔵書のかずかず」（『青年に寄す』労働大学，1975年）や，『読書は喜び』（新潮社，1977年）などにおいて紹介しておられる。

なお，二村一夫氏のデータ分析によれば，外国語図書はドイツ語文献が全体の90パーセントを占め，なかでもマルクス主義や経済学を中心とした社会科学書が5807冊でもっとも多い。次いで歴史書が1966冊，哲学・宗教書が843冊，文学書561冊となっている。著者別で見た場合，マルクスの著書（エンゲルスとの共著も含む）が397冊と一番多く，次いでレーニンの277冊である。またエンゲルスの著書は99冊，カウツキー93冊，スターリン72冊となっている。詳しくは二村前掲稿を参照されたい。

これらの外国語図書で文句なしに稀覯書としてあげられるのは，マルクス自身，あの独特な筆致で欄外に書き込みを行っている『資本論』第１巻の初版本（1867年）と，ダーウィン著『種の起源』と同じ1859年に発行され，世界に三冊しかない『経済学批判』の初版本であろう。このうち『資本論』の初版本は，実は当研究所にもマルクスが友人のクーゲルマン博士に献呈した，世界で唯一のサイン入りのものがある。しかしマルクスの書き込みがある『資本論』は他になく，まことに貴重なものである。

『マルクス・エンゲルス全集』（改造社），世界で最初のマル・エン全集

なお，当研究所には，ほかにマルクスの書き込みがある文献として『哲学の貧困』（1847年）があった。もと研究所主任の是枝洋氏によれば，この『哲学の貧困』は，研究員の櫛田民蔵がドイツ留学中の1921年７月15日，ドイツ社会民主党文庫主任のエルンスト・ドラーンより譲り受けたもので，ドラーンは，マルクスの書き込みに気づかないで櫛田に寄贈してしまった，いわくつきの本であったとのことである。この本は現在，櫛田の他の蔵書とともに，東北大学図書館の「櫛田民蔵文庫」に収められている。

向坂文庫にはこのマルクスと生涯行動を共にした，エンゲルスの著作のほとんどが揃っている。とくに向坂文庫の外国語図書に関連して，ここで特筆しておきたいことは，1928（昭和３）年６月，向坂逸郎・大森義太郎ら「労農派」の学者が編集委員となって，改造社から『マルクス・エンゲルス全集』（全33巻，～1935年）が刊行されたことである。これは，世界で最初のマルクス・エンゲルスに関する全集であった。実はこの全集の底本となった文献は，そのほとんどを向坂が自ら収集し，所蔵していたものであった。もし，向坂がかくも貪欲に，ゆき夫人によれば九州帝大からの俸給や著作収入のほとんどをつぎ込み，こだわり続けてマルクス・エンゲルスの文献を集めなければ，『マルクス・エンゲルス全集』の刊行はなかったであろう。ついでに紹介すると，向坂文庫にはマルクスの『資本論』やエンゲルスとの『共産党宣言』など主要文献に関しては，ドイツ語はもちろん，英，仏，露，中の各国語版も揃っている。

外国語図書は19～20世紀の文献が中心である。だが18世紀に出版された文献も，例えばズュースミルヒの『神の秩序』（1741年）など，６冊ほどある。19世紀中に発行されたものは全部で646冊ほどあるが，編集者のデナーがマルクスを高く評価し，マルクス自身多くの項目の執筆を担当した辞典『ニューアメリカン・エンサイクロペディア』や，リュイス・H. モルガンの『アンシャントソサエティ』（1877年）などは，稀覯書の部類に入るだろう。

世界の社会主義政党に関する文献では，ほとんどドイツ社会民主党とドイツ共産党に関する出版物で，大会記録や議事録なども含めて収められている。国際社会主義運動でも，1864年に結成され

大原社研「向坂文庫」の書庫

た第一インターナショナルの規約，同総務局の『議事録』（英語版４冊）をはじめ，第二，第三インターナショナル関係のものが多い。当研究所にも，ドイツ社会民主党関係で150冊，共産党関係で490冊，さらに第一，第二インター関係で90冊，コミンテルン関係で170冊余の文献が所蔵されている。これに向坂文庫の関連文献が加わった結果，当研究所は，東京大学名誉教授の大内力氏の言葉を借りれば，「社会主義文献の世界的宝庫」となっているのである。

20世紀に入ってからの文献では，第二インターナショナルを理論的に指導したカウツキーの著書が『プロレタリアートの独裁』（1918年）をはじめ93冊ほどあり，さらにレーニン，クロポトキン，トロツキー，プレハーノフ，バクーニン，スターリンなどロシア革命の舞台に登場する人物や，ロシア革命史に関係する文献も目立って多い。このほか，向坂文庫には，1789年のフランス革命と1871年のパリ・コミューンを中心とするフランス近代史や社会思想に関する文献も少なくない。

社会主義以外の文献をあげると，経済学関係ではスミス，マルサス，リカード，ミルらイギリス古典学派の文献（日本語図書でも彼らに関するほぼすべての邦訳書がある）や，ドイツ歴史学派のリスト，ワグナー，ゾンバルトらの文献も多い。哲学・思想関係では，イギリス自由主義者のロックに関する文献もあるが，カントやヘーゲルなどのドイツ観念論哲学やディドロ，ヴォルテール，グランベールなど，フランス啓蒙主義者の文献も多数収められている。

ここで，外国語新聞についても紹介しておこう。向坂文庫の外国語新聞は，日本語新聞とくらべてタイトルとしてはそう多くはない。けれども所蔵しているものは，目を見張る稀覯紙ばかりである。外国語新聞は図書と同様に，ドイツ関係が中心である。また時期的に見たばあい，1910～20年代の新聞が中心となっている。なお，稀覯紙のうち19世紀の新聞については，1843年にルーゲがマルクスの協力のもとにヘーゲル左派の機関紙として創刊した『独仏年誌』，1848年ドイツ３月革命期にケルンで発刊した『新ライン新聞』，1876年に発刊されたドイツ社会民主党機関紙『フォールヴェルツ』（『前進』），ビスマルクによるドイツ社会民主党に対する弾圧後，エンゲルスが亡命中のスイスとロンドンで発行した非合法の新聞『ゾツィアルデモクラート』（1881年）などを例示的にあげておこう。

外国語雑誌についても貴重なものが多い。一例として，カウツキーが編集にあたったドイツ社会民主党機関誌『ノイエ・ツァイト』（1883年），ドイツ共産党機関誌『インテルナツィオナーレ』（1915年）をはじめ，ルーゲらヘーゲル左派の機関誌『ドイツ学問芸術のためのハレ年報』（のち

『ドイツ年報』と改題），さらに『ニューロシア』（1922年），『レーバーヘラルド』（1934年）などをあげておこう。これらの雑誌も他ではなかなか見られず，稀覯誌に入るだろう。

向坂文庫の外国語図書や新聞・雑誌については，近江谷左馬之介氏の「向坂先生のご本」（『社会主義』第264号，1989年２月）などで紹介されている程度で，まだその全容は明らかにされていない。筆者は先年来，社会主義協会の編集部より，向坂文庫における外国語図書や新聞･雑誌について子細な文献紹介を求められていた。けれども，文献の膨大さに加えて，筆者の未知の文献が多数にのぼり，まだ約束を果たしていない。

2　日本語図書

向坂文庫の日本語図書を特徴づけるのは，２万冊を超すその数の多さもさることながら，社会科学，とりわけ経済学（理論・歴史・財政・政策，経営），政治学，法律学，社会学，社会思想，社会政策，社会主義，労働運動史はいうに及ばず，哲学，歴史学，文学，言語学，宗教学，新聞学，芸術学（美術・音楽・写真），農業，鉱工業，技術・工学，自然科学（数学・物理学・地質学），医学など，あらゆる学問領域にわたって収録していることである。ちなみに芸術関係だけでも，島村抱月『芸術講話』（1917年），尾瀬敬止『革命芸術体系』（1927年）など78冊に及び，このほかセットものの内外の美術全集や写真集も数十点を超す。

この日本語図書について何といっても注目されるのは，向坂自身，かつて自らの蔵書について「日本語の本は日本資本主義発達史を中心に集められている」（前掲『読書は喜び』）と語っているように，日本資本主義の形成や発展に関する文献が群を抜いて多いことである。この日本資本主義発達史関係の文献では，たとえば河上肇『近世経済思想史論』（1920年），本庄栄治郎『近世社会経済叢書』（全12巻，1926年），小野武夫編『近世地方経済史』（全10巻，1932年）など近世経済史に関するもののほか，明治維新，地場産業，地域経済史，企業・経営体，社史，財閥形成，資本蓄積，戦時経済史，統制団体，コンツェルン，さらに高橋亀吉『日本資本主義発達史』（1929年），土屋喬雄・岡崎三郎『日本資本主義発達史概説』（1937年），岩波書店『日本資本主義発達史講座』（1932―33年）など，日本資本主義発達史に関する文献をも含み，向坂文庫における日本語図書の一つの特徴をなしている。

昭和恐慌期，日本におけるマルクス経済学研究のメインテーマの一つは農業問題であった。マルクス主義の理論陣営では，日本農業の封建性や資本主義の構造的特質をめぐり，革命主体の形成との関連でこれを分析する日本資本主義論争が起こった。この日本資本主義論争の争点の一つは，地主的土地所有の本質的規定，すなわち高率小作料をめぐってのものであった。向坂ら「労農派」は，機関誌『労農』などにより，その小作料は高率ではあるが，いわば“前”資本主義的な地代で，現物小作料という形態も，観念的には貨幣化された貨幣地代に近いもので，農民に対する土地緊縛など経済外強制も基本的には存在していないと分析し，野呂栄太郎ら「講座派」の封建地代とする見解を批判した。

この時期，当研究所の『大原社会問題研究所雑誌』も，たとえば櫛田民蔵が「わが国小作料の特質について」（第8巻1号，1931年6月），「小作料の地代範疇について」（第10巻２号，1933年7月）を発表するなど，「労農派」における理論構築の一拠点となっていたのである。

向坂文庫には，この日本資本主義論争に関する文献が，向坂自身とくに地代論のテーマにおいて「労農派」の陣営をリードしていたこともあってか，平田良衛訳編『マルクス主義地代論』（1930年），自著『地代論研究』（1933年），内田穣吉『日本資本主義論争』（1937年），リチャード・ジョーンズ『地代論』（鈴木鴻一郎ほか訳，1942年）をはじめ実に多い。今回，『向坂逸郎文庫目録　Ⅱ　日本語図書索引』を調べて改めて気づいたのであるが，向坂は，戦後期に入ってからも日本資本主義論争の評価に関心をいだいていたようで，対馬忠行『「日本資本主義論争」史論』（1947年），社会経済労働研究所『日本資本主義論争史』（同）など，関連の研究書を収集し検討を重ねていたようである。

さらに，日本資本主義論争とも関連するが，向坂文庫には同じ「労農派」のメンバーの著書，たとえば櫛田民蔵，猪俣津南雄，土屋喬雄，大内兵衛，稲村順三，大森義太郎，脇村義太郎，岡崎次郎，小堀甚二らの全集や著作集，著書も，野呂栄太郎，山田盛太郎，平野義太郎ら「講座派」の論客たちの著書と合わせて，ほとんど集められている。

これより先，1922年２月，小泉信三が雑誌『改造』に「労働価値説と平均利潤率の問題」を発表したのを機に，河上肇や櫛田民蔵，山川均らと価値論争が始まった。1925年５月，ドイツ留学から帰国した向坂もこの論争に参加した。向坂文庫には，この価値論争についても，小泉信三『価値論と社会主義』（1925年）をはじめ，マルサス・玉野井芳郎訳『価値尺度論』（1949年）やヒルファーディング・塚本三吉訳『労働価値説の擁護』（1930年）の翻訳書を含め，多数収められている。なお，価値論の研究は，戦後，宇野弘蔵らによって深められたが，向坂文庫にはその宇野の『価値論』（1947年）はじめ，関連研究書も多数収められている。

このほか，向坂文庫の日本語図書で特徴的なのは，社会主義やマルクス主義の思想・運動・歴史に関するものがとくに目立ち，筆者は改めて数えたわけではないが，日本語図書でも外国語図書でもタイトルとしてはこの領域の文献が一番多いと思われる。とくに，前述したが世界で最初の『マルクス・エンゲルス全集』から大月書店版の『レーニン全集』（1969年）にいたるまで，マルクス，エンゲルス，レーニン，スターリン，ブハーリン，カウツキーなど，マルクス主義者の全集，著作集，著書はほとんど揃っていると言ってよいだろう。また，翻訳書についてもマルクス・エンゲルス『共産党宣言』だけで８社，同『資本論』も８社，マルクス『剰余価値学説史』は５社，レーニン『国家と革命』も５社の版のものがあり，向坂自身，マルクス主義の翻訳文献について意識的に集めたことがうかがわれる。

これら社会主義やマルクス主義に関する翻訳文献と並んで，明治期における民権論者や日本の社会主義者の著書も実に多い。

明治期では，大井憲太郎『仏国政典』（1873年），中江兆民『三酔人経綸問答』（1887年），幸徳秋水の『廿世紀之怪物　帝国主義』（1901年），『社会主義神髄』（1903年），『平民主義』（1907年）や，片山潜と西川光二郎の共著で日本で最初の労働運動史として著された『日本の労働運動』（1901年），片山潜の『我社会主義』（1903年），木下尚江の処女作で反戦小説の先駆となった『火の柱』（1904年），山口孤剣の『社会主義と婦人』（1905年）などがある。いずれも初版本である。また，発売と同時に発禁となった荒畑寒村の『谷中村滅亡史』（1907年）や，明治期の政治・社会の腐敗を告発・批判した山路愛山の『現代金権史』（1908年），『社会主義管見』（1906年）なども注目されよう。

なお，片山潜の図書のうち，研究所では『万国社会党』（1907年）の所蔵を期待したが，残念ながら向坂文庫には含まれていなかった。

向坂文庫の日本語図書では，とくに現在では入手困難な明治期における社会主義関係の文献に貴重なものが多い。ここでは，たとえば平民社や民友社の叢書，さらには福井準造『近世社会主義』（1899年），煙山専太郎編『近世無政府主義』（1902年），久津見蕨村『無政府主義』（1906年）などをあげておきたい。

堺利彦旧蔵図書の一部

大正・昭和戦前期の文献については，日本社会運動の勃興・発展期であり，事例的に紹介するのも困難なほどの冊数となっている。さしあたり，大杉栄『労働運動の哲学』（1916年），『大阪朝日新聞』に連載中から大きな反響を浴び，版を重ねた河上肇の『貧乏物語』（同），鈴木文治『日本の労働問題』（1919年），山川均『社会主義の立場から』（同），日本で最初の翻訳となった高畠素之訳の『資本論』（1920年），大杉栄『獄中記』（同），堺利彦『堺利彦全集』（全6巻，1933年）などをあげておこう。付言すれば，幸徳秋水，堺利彦，河上肇，山川均，大杉栄，伊藤野枝，荒畑寒村，鈴木茂三郎，福本和夫，佐野学ら，社会主義者の著書，伝記，回想記などに関してもほとんど揃っている。とくに日本社会運動の長老的指導者であった堺利彦の著書については，『社会主義学説の大要』（1922年）など52タイトルすべてを集め，ほかに野依秀市『堺利彦を語る』（1930年）などの回想記や研究書も集められ，堺に関する一大コレクションとなっている。

このほか，社会問題や労働運動に関する文献も豊富で，横山源之助『日本之下層社会』（1899年），農商務省『職工事情』（1903年），同『諸工業職工事情』（1936年），金子喜一『海外より見たる社会問題』（1907年），八浜徳三郎『下層社会研究』（1920年），細井和喜蔵『女工哀史』（1925年），山川亮蔵『下層民』（1936年）などがある。いずれも初版本である。

3　堺利彦旧蔵書と「大逆文庫」

向坂文庫は，明治・大正・昭和戦前期における日本の社会・労働運動に関する文献の宝庫といってよい。なかでも日本社会運動上，とりわけ注目されるのは，平民社の創設者・堺利彦の旧蔵書である。

この堺利彦旧蔵書については，向坂自身，前掲の『読書は喜び』において思い出を語っておられる。川口武彦氏も「『向坂文庫目録』第一冊の出版――堺利彦文庫のことにふれて――」と題して，

雑誌『社会主義』第348号（1993年２月）で紹介しておられる。堺利彦旧蔵書についてさらに詳しくは，これらの著書・論稿をお読みいただきたい。

ところで堺利彦旧蔵書は，向坂自身，転居を重ね，また関係者の閲覧などによって分散し，あるいは返却の際に他の配架に紛れ込み，研究所が寄贈を受けた時点では一括してまとまっていなかった。しかし，堺利彦旧蔵書には「T.Sakai」の署名や，「彦」「枯川」「堺」「堺利彦印」「堺利彦」などの所蔵印が，表紙ないし奥付に付されており，あるいは表紙に付箋がつけられているので容易に確認することができる。

堺利彦旧蔵書の中心は外国語図書と，幸徳秋水・堺利彦ら平民社のメンバーをはじめ，初期社会主義者が編集・発行した『平民新聞』など明治・大正期の新聞である。このうち新聞関係の所蔵については後述する。

堺利彦旧蔵の外国語図書では，『資本論』『価値・価格及び利潤』などマルクスの経済学関係著作の英訳本や，エンゲルス，レーニン，トロツキーらの著作，シンクレアの文学や評論などの作品がおもなものである。日本語図書では，1920年に高津正道らが結成した社会主義思想団体の暁民会や，1921年に山川均の指導下に結成された水曜会のパンフレット類が目立つ程度で，数としてはそう多くない。ただ，堺旧蔵書には堺自身の研究ノートや，1920（大正９）年12月９日に堺，山川均，大杉栄らを発起人として結成された日本社会主義同盟の名簿，1925年に片山潜が中国で執筆した未発表の原稿『在露三年』なども含まれ，資料的価値は高い。なお，『在露三年』は，自伝『わが回想』（原本はモスクワのマルクス・レーニン研究所に所蔵されている）の事実上の続編であり，堺が補正加筆を試みて保管していたものであった。

さらに，堺利彦旧蔵書には「大逆文庫」が含まれている。1910（明治43）年５月，桂太郎内閣は天皇の暗殺を計画したという虚構の容疑で社会主義者ら26名を検挙し，翌年１月24，25の両日，幸徳秋水・大石誠之助ら12名に対して死刑を執行した。いわゆる大逆事件である。堺は，幸徳らが処刑されたのち，彼らが持つ蔵書や新聞を譲り受け，時の権力への怒りと抗議の意を込めて「大逆文庫」と命名し，売文社において大事に保管していたものであった。この「大逆文庫」の図書・新聞類には，縦4.2cm×横1.7cmの朱印で「大逆文庫」と捺印されている。この「大逆文庫」も外国語図書と新聞類が中心で，日本語図書は河上肇『社会主義評論』（1906年）などが散見されるぐらいで，数としてはそう多くはない。いずれにしても，堺利彦旧蔵書と「大逆文庫」は，日本における初期社会主義者の思想と運動の研究では第一級の史料といえよう。

これら「大逆文庫」を含む堺利彦旧蔵資料は，堺が1933年（昭和８）１月23日，脳溢血で亡くなった後，山川均と荒畑寒村の仲介で向坂の自宅に移されて大事に保管され，のち1965（昭和40）年に川口武彦氏ら当時の社会主義協会幹部の尽力で，近藤真柄氏（堺利彦長女）より正式に買い受けたものであった。

４　逐次刊行物――日本語新聞

逐次刊行物（新聞・雑誌・年鑑）に関しては，すでに『向坂文庫目録　Ⅳ　逐次刊行物』（1995年10月）が刊行されている。収録タイトルやバックナンバーの状況については，目録を参照していただきたい。ちなみに収録点数は日本語のものが3393タイトル，外国語（ロシア語・中国語ほか）

のものが593タイトルにたっしている。ここでは日本語の逐次刊行物について紹介する。

まず，逐次刊行物でとくに注目されるのは「堺利彦印」「大逆文庫」などの蔵書印が押されている明治・大正期の新聞であろう。1903（明治36）年10月23日，幸徳秋水・堺利彦らは平民社を結成し，翌11月に週刊『平民新聞』を創刊した。この週刊『平民新聞』は，日本における最初の社会主義運動の機関紙で，非戦と社会主義の立場から一貫して日露戦争に反対し，このため政府の激しい弾圧を受け，1905年１月に第64号で廃刊となっている。堺らはこの後，同年２月に加藤時次郎らの協力を得て週刊『直言』を発行した。この『直言』は，『平民新聞』の後継紙として反戦・平和の論陣をはる一方，第一次ロシア革命の動向を紹介したが，1905年9月5日の日比谷焼打ち事件をきっかけに３号で発禁となった。平民社もこの年の10月に解散を余儀なくされている。このあと同年11月に平民社の同人であった西川光二郎らが半月刊の『光』を創刊し，同紙は翌1906年２月24日，片山潜・堺利彦らと結成した日本社会党の事実上の機関紙となっている。

以上の週刊『平民新聞』『直言』『光』の三紙は，平民社におけるいわば直系の新聞で，草創期の日本社会運動に指針を与えた機関紙でもあった。

さらに堺利彦旧蔵の「大逆文庫」には，堺が，1906年末に平民社を再興し，翌1907年１月15日に西川光二郎や石川三四郎らと発行した日刊『平民新聞』と，同年６月に堺と行動を共にした森近運平が大阪平民社から発行した半月刊紙『大阪平民新聞』（第11号より『日本平民新聞』と改題）もある。前者の『平民新聞』は，日本における社会主義実現のあり方について幸徳らの「直接行動論」と田添鉄二らの「議会政策論」が紙上で激しく論争したことで知られるが，『大阪平民新聞』は，前者の立場を鮮明にした新聞であった。両紙とも製本されているものの，傷みがひどい。このうち日刊『平民新聞』の表紙裏には，長方形の「大逆文庫」の朱印のほか，山川均や荒畑寒村の印も並んで押してある。なお『大阪平民新聞』の表紙にも，いまにもちぎれそうな付箋が付けられていて，それには「何卒取り扱ひ方御注意願ひます」との堺のことわりと印が押されていて，細心の注意で扱われていたことを示しており興味深い。

これら堺利彦旧蔵の新聞は，初期の社会主義者たちが天皇制国家の熾烈な弾圧のなかでいのちがけで編集・発行し，保存してきたオリジナルな新聞で，日本における社会主義の運動史上，まことに貴重な新聞であろう。これらの新聞は当研究所でも特別に慎重に扱っていて，複写はできないが，見学及び原紙での閲覧も可能である。希望者は資料係まで事前に申し出てほしい。

このほか明治期の新聞としては，宮崎寅蔵（滔天）が孫文らの中国革命の事業に共鳴してその支持を旗印に創刊した『革命評論』（1906年）や，片山潜が「議会政策」派の機関紙として創刊した『社会評論』（1907年）などもある。また，向坂は明治期に創刊された社会運動の機関紙の復刻版も意識的に集めていたようで，向坂文庫には，片山潜主筆の半月刊誌『労働世界』（1897年12月），木下尚江・安部磯雄らキリスト教社会主義者の月刊新聞『新紀元』（1905年11月）など，これまで労働運動史研究会編で明治文献資料刊行会が出版した「明治期社会主義史料」など，復刻版のほとんどが揃っている。

向坂文庫にはこれらの社会運動関係の新聞とは別に，時事・風刺新聞，たとえば野村文雄らの『團團珍聞』（1877年３月），福沢諭吉らの『時事新聞』（1882年２月），黒岩周六の『万朝報』（1892年11月）などがあるが，かなりの欠号がある。

ところで，1917（大正６）年のロシア革命につづく，翌18年の米騒動の勃発は，大逆事件以来の「冬の時代」を打ち破り，日本社会運動の新たな高揚を促すきっかけとなった。社会主義者たちは公然と活動を再開し，労働運動が本格化する一方，農民，学生，女性，消費者，非差別部落の解放，借家人運動など新しい社会運動が勃興した。向坂文庫には，この新しい時代動向を反映して展開された運動団体の機関紙を中心に，104タイトルの新聞が収められている。

この大正期の新聞でまず注目されるのは，1914（大正３）年１月27日，堺利彦が創刊した『へちまの花』（のち『新社会』と改題）や，この年10月15日に大杉栄・荒畑寒村らが平民社の伝統を継承して創刊した月刊『平民新聞』である。1919年３月１日，岩出金次郎が荒畑の協力を得て大阪で創刊した月刊『日本労働新聞』などもある。いずれも「大逆文庫」の新聞である。とくに月刊『平民新聞』は，翌年３月まで６回発行され，創刊号では第一面に大逆事件で処刑された幸徳秋水の墓の写真を載せ，巻頭言でも「階級闘争的反逆」を訴えるなど，激しく論陣をはったため，第４号を除いて毎号発禁とされ，当研究所にも無いものであった。

このほか労働組合関係では，印刷工組合信友会の『信友』（1916年3月），大杉栄・近藤憲二らの月刊の『労働運動』（第１次，1919年10月），全日本鉱夫総連合の『鉱山労働者』（1920年11月），日本労働総同盟関東地方評議会の『労働新聞』（1924年12月創刊，のち日本労働組合評議会の機関紙），労働社の『労働者』（1921年），共産社の『労農新聞』（1923年）などがある。なお，『労働運動』は事実上，アナーキズム系組合の中央機関紙として発行され，1927年11月の第５次まで続いたが，向坂文庫には1924年１月の第４次分までしか所蔵されていない。

農民組合や部落解放運動の機関紙では，主要なものは基本的に揃っている。前者については，日農（日本農民組合）の『土地と自由』（1922年１月），日農同盟会の『日本農民新聞』（1922年７月），農村運動同盟『小作人』（1922年10月）や，日農岡山県連の『農民岡山』（1924年12月）などをあげておこう。後者については，1924年６月に全国水平社機関紙を引き継いだ『水平新聞』，同青年部機関紙『選民』（1924年２月創刊，のち『青年大衆』と改題），難波英夫らの『ワシラノシンブン』（1924年７月創刊，のち『解放新聞』と改題）などがある。

他方，借家人や消費組合関係はなぜか極端に少ない。三田村四郎・逸見直造らの『借家人新聞』（1921年８月），杉原正夫らの『俸給者組合ＳＭＵ月報』（1922年５月），消費組合連盟『消費組合運動』（1924年６月）があるにすぎない。しかもこれらの新聞は断片的で，１，２号があるだけである。

このほか，注目される新聞としては，共産社（関猛郎）の『労農新聞』（1923年１月），労農社の『労農国家』（1923年８月），政治研究会の『民衆政治』（1925年４月創刊，のち『大衆教育』と改題）がある。また，黒濤会（朴烈）の『暗濤』（1922年４月），太い鮮人社の『太い鮮人』（1922年12月），東京朝鮮人労働同盟（朴憲）の『労働同盟』（1924年１月）など，在日朝鮮人団体の機関紙も収録されている。

昭和戦前期の新聞は253タイトルに及び，向坂文庫の戦前期における新聞では他を圧して多い。これらの新聞の多くは，無産政党を初めとする社会運動団体の機関紙である。

1925（大正14）年３月，治安維持法と抱き合わせで普通選挙法案が可決され，これをきっかけに1928（昭和３）年２月における第一回普選へ向けて無産政党の結成があいついだ。向坂文庫には，

たとえば社会民衆党の『民衆新聞』（1926年），労働農民党の『労働農民新聞』（1927年），日本労農党の『日本労農新聞』（同）のほか，東京無産党の『無産大衆』（1930年），日本無産党の『日本無産新聞』（1937年）などもある。なお，『日本無産新聞』は当研究所にもなかったもので，これまでは無産政党の機関紙では“幻の新聞”と呼ばれていた。『労働農民新聞』でも，1928年３月の第16号や同年12月の第26号の号外が新しく発見されている。

昭和戦前期の新聞については，無産市民社の『無産市民』（1929年），新築地劇団の『月刊新築地劇団』（1936年），新聞文芸社の『日本学芸新聞』（1937年）など，実に幅広く集めている。だが，残念ながら所蔵号が１号のみというのも結構多い。当該の所蔵号が，創刊号ならそれなりに理由は推測されるが，たとえば女性時代社の『女性時代』の場合は第４号（1929年８月）であり，純真社の『農村と全人類』の場合は第８号（1932年１月）であり，1936年１月７日に能勢克男・中井正一らが京都で発行した反ファシズム人民戦線の新聞『土曜日』のばあいは，第33号（1937年５月20日）だけである。偶然ではあるが，このうち『土曜日』の第33号は，1974年７月に三一書房が刊行した復刻版にも収録されていないものであった。

次に，戦後の新聞について紹介しよう。当研究所の中心事業の一つに，内外における労働組合や社会運動団体に関する機関紙・誌の収集があげられる。研究所がこれまで収集した労働組合の機関紙は，戦後の日本に関するものだけで700タイトルを数え，これらは1920（大正9）年から続く『日本労働年鑑』の編集に活用する一方，整理・保存し，公開して日本労働史や労使関係の研究者に便宜をはかってきた。

向坂文庫の新聞で柱となっているのは，向坂自身，労働運動の理論指導や学術運動の第一線に立たれていたこともあって，労働組合の機関紙や社会運動団体の機関紙がかなり収集されていることである。ちなみに向坂文庫における戦後期の新聞は760タイトルに及び，日本語新聞全体の約70％を占めている。その内訳は，労働組合機関紙220，社会運動団体機関紙209，政党・政派の機関紙35，学生新聞107などが主なものである。詳しくは『向坂文庫目録 Ⅳ　逐次刊行物』をご覧になっていただきたい。

さて，向坂文庫の新聞については，従来は，週刊『平民新聞』など堺利彦旧蔵の「大逆文庫」の新聞や，エンゲルスが亡命先のスイスで自ら編集した『ゾツィアル・デモクラート』などの稀覯紙に目が向き，戦後期の新聞についてはあまり関心が払われてこなかった。しかし，向坂新聞には日本社会党の機関紙をはじめ，日本労働史や日本現代史の研究者が探し続けてきた新聞がいくつもあるのである。

1945年11月に日本社会党が結成され，翌46年１月１日付で中央機関紙『日本社会新聞』が創刊された。『日本社会新聞』は，のち『社会新聞』『週刊社会新聞』と改題され，結党直後における日本社会党の動静を伝え，とくに首班内閣としてになった片山哲内閣の政策展開を記録し，占領期における政党政治史研究においては不可欠の基本文献となっている。そして，日本社会党は1951年10月に講和・安保問題をめぐって分裂して以降，右派社会党が『社会週報』『日本社会新聞』を，左派社会党が『党活動資料』『党活動』をそれぞれ発行している。

向坂文庫には，残念ながら最初の『日本社会新聞』は含まれていないものの，これ以外の日本社会党機関紙については多数収められている。筆者は，このことの意義を高く評価したい。当研究所

では現在，占領期における日本社会運動の基本文献を復刻・集成する『戦後社会運動資料』の刊行をすすめている。この復刻事業に日本社会党の機関紙も含まれているが，散逸が著しく，国立国会図書館にも揃っておらず，当研究所でも何号もの欠号があり，学術機関よりその早期に収集・整備が求められていたものであった。今回，向坂文庫を受け入れた結果，日本社会党の機関紙については，当研究所の欠号分を向坂文庫のもので埋めることができ，ここに完全復刻の見通しが立ったのである。

1955年10月，日本社会党は統一を回復し，新しい中央機関紙『社会新報』が創刊された。この『社会新報』は，左派社会党の『党活動』を改題したものであるが，向坂文庫には号外を含めて完全に収めてあり，さらに1955年以降の府県本部や支部の機関紙，たとえば東京都連の『都連党報』『東京社会新報』などがある。

このほか，日本社会党との関連で注目される新聞に，1947年３月に西尾末広らが創刊した『社会新報』（統一後の中央機関紙と同じ題字）と，1952年１月左派社会党の提唱で創刊され，社会タイムス社から発行されていた『社会タイムス』がある。このうち前者の『社会新報』は，中央機関紙の『社会新聞』が，鈴木茂三郎らの左派寄りに編集される傾向にあったのに反発した西尾ら右派執行部が党外で発行した左派批判の新聞で，これまでその存在すら知られていなかったものである。後者の『社会タイムス』は，「平和と独立を守り，ファシズムとたたかう健全な世論の形成」（編集綱領）をはかることを目標に，事実上，社会党・総評ブロックの機関紙として日刊（のち週刊）で発行され，日本共産党が半非合法下にあるなか，革新世論を代表した唯一の新聞であった。また，1955年４月大阪における社会党府連と総評が主体となって発行した『大阪社会タイムス』もほとんど欠号がない。

日本社会党以外の新聞では，1948年12月，黒田寿男ら日本社会党の最左派が主体となって結成した労働者農民党の機関紙『労農新聞』『労農週報』なども貴重な新聞に入るだろう。なお，研究所では当初，政党の機関紙として日本自由党の『自由党報』『自由党新聞』や，日本協同党の『日本協同党新聞』，民主自由党の『民主自由新聞』『再建』，日本民主党の『民主タイムス』などの発見を期待したのであるが，『自由党報』がわずかにあるぐらいである。

さて，労働組合の機関紙では，何といっても1950年７月11日に結成をみた総評の機関紙『総評』『総評新聞』や，全国単産の機関紙をあげなければならない。この単産の機関紙は労働組合新聞のなかではもっとも充実していて，国労の『国鉄新聞』をはじめ，印刷出版の『印刷労働』，自動車運輸の『トラック労働』，全鉄労の『鉄鋼労働』，全国造船の『ゼンセン』，全逓の『全逓』，海員組合の『船員しんぶん』，全自動車の『全自動車ニュース』，全港湾の『港湾労働』，合化労連の『合成化学』など，あらゆる産業にわたっている。総評加盟の単産機関紙についてはは，欠号はあるものの，すべての機関紙が収められている。

とりわけ鉱山関係と教育関係の新聞が多く，前者については日炭の『炭連』，炭鉱協の『炭鉱協』，炭協の『たんこう』，炭労の『炭労』『炭鉱新聞』などをあげておこう。これらの新聞の記事の一部には，「赤」の囲みやアンダーライン，向坂の筆跡と思われるメモなども書き込まれている。そうした例が他の新聞にあまり見られないことから，向坂自身，炭鉱関係の新聞についてはかなり関心をもって読んでいたと思われる。

また，向坂が1960年の三池闘争のさい深く係わった三池炭鉱労組の『みいけ』や，日炭高松労組の『たかまつ』，三菱高島炭鉱労組の『前進の旗』，八幡製鉄労組の『熱風』，日本鋼管川鉄労組の『川鉄新聞』などの単位組合の機関紙も所蔵されていて，鉄鋼・炭鉱関係労組の機関紙は実に豊富である。後者の教育関係では，日教の『Kyoiku-Rodo』，全教の『週刊教育新聞』『教育新聞』などをあげておこう。

これら炭鉱や教育関係の占領期の新聞については，研究所でも欠号が多く，向坂文庫を受け入れたことでかなり補充することができた。なお，戦後期の労働組合新聞で，当研究所になかった組合新聞は56タイトルに及ぶ。

日本の社会運動は戦後，言論・出版・結社の自由を得たことで，戦前とは比較できないほどの広がりと厚みを帯びるものとなった。向坂文庫には，憲法擁護，反戦・平和，女性解放，弾圧犠牲者救援，部落解放，農民，生協，農協，消費組合，青年・学生，友好親善，アナーキズム，右翼，在日朝鮮人，領土返還，統一戦線，学術，文化など実に幅広い社会運動団体の機関紙を収め，その数は209タイトルにたっしている。このうち研究所になかったものが78タイトルに及ぶ。当研究所は，向坂文庫につづいて「鈴木茂三郎文庫」も受け入れた結果，労働組合資料と並び，社会運動資料でも名実ともに日本における社会運動資料の宝庫となっている。とくに戦前期は社会運動の全領域を網羅しているといってよい。

これらの社会運動団体の機関紙でもとくにめだつのは，反戦・平和，犠牲者救援，友好親善，青年・学生関係の新聞である。反戦・平和運動関係では，原水協の『原水爆禁止日本協議会ニュース』，日本平和委員会の『平和新聞』，核禁会議の『核禁会議』，世界市民国際登録所の『世界市民』などをあげておこう。犠牲者救援運動の関係では，国民救援会の『救援新聞』や自由人権協会の『人権新聞』，公害運動の関係では水俣病を告発する会の『告発』，友好親善運動では『日独友好ニュース』をはじめ，ソ連，中国，チェコスロバキア，キューバなど各友好協会の会報を収めている。また青年運動の新聞でも，たとえば戦後日本における青年学生運動の原点に位置する民主主義青年会議の機関紙『青年新聞』や，日本反戦学生同盟の『反戦旗情報』などは，他の学術機関にあまり所蔵されていない珍しいものの部類に入る。

向坂は生前，長らく日本社会党の顧問を務め，また社会主義協会の代表として社会主義の研究と実践の先頭に立たれた。こうした関係で向坂文庫には，日本社会党を支援する団体の会報や，社会主義協会九州支局の『新聞社会主義』をはじめ各支部の機関紙が多数収められ，社会党における理論左派の動向を知るうえでは重要な資料となっている。

さらに，向坂文庫には『九州大学新聞』や『東京大学新聞』，さらに高等学校の新聞など戦後期だけで122タイトル（戦後の新聞全体の17パーセント）の学生新聞が所蔵されおり，一つの特徴をなしている。これらの学生新聞は，不思議なことであるが，時期的には1955年と56年に集中している。なぜ向坂がこの時期に集中的に学生新聞を集めたのか。1955年といえば，この年の10月に社会党が統一し，11月に保守合同により自民党が結成され，いわゆる55年体制が構築された年であった。こうした動向のなかで翌56年６月，全学連の第９回大会が「沈滞を克服して学生運動の創世期が始まった」と宣言を発表するが，向坂が，学生運動の再出発にあたって何らかの関心をいだき，その戦略を展望したのだろうか。

このほか，戦後期の注目される新聞として，幣原喜重郎内閣の打倒運動や日本国憲法の自主制定をめざした民主人民連盟の機関紙『民主戦線』，鈴木茂三郎が所長を務め，占領期における日本社会党の事実上のシンクタンクとなっていた社会主義政治経済研究所の機関紙『政治経済通信』，経済復興会議の機関紙『経済復興』，ＧＨＱの民主化政策を支持しその徹底を目標に創刊した自由新聞社の『自由新聞』，東京・三多摩地区の知識人が論陣をはった国際自由人協会の『自由人新聞』などをあげておきたい。いずれも占領期の社会運動団体の機関紙である。

このうち『民主戦線』は，これまでその存在すら知られていなかったもので，山川均主筆で第６号まで発行されている。向坂は，正式結成をみた民主人民連盟の副議長であった。今回，荒畑寒村がその東京支部として創刊した東京民主人民連盟の『民主戦線ニュース』とともに発見されたものである。

なお，社会主義政治経済研究所の『政治経済通信』は，のち『社会主義政経週報』『週刊社会主義』『政経週報』『政経通信』と改題されたが，向坂文庫にはこれらも入っている。また，片山哲内閣における日本経済の復興路線，すなわち傾斜生産方式の実践を経済安定本部や商工省と協力してになった経済復興会議の資料については，最近，中北浩爾・吉田健二編『片山・芦田内閣期経済復興運動資料』（全10巻，日本経済評論社，2001年）として刊行された。この資料集では，『経済復興』をはじめ向坂文庫の所蔵のものが多数，原本として使用されている。

５　逐次刊行物――日本語雑誌

向坂文庫の日本語雑誌は，年鑑・年報・通信類を除いて563タイトルを数えている。大原社研は，第一次世界大戦終結翌年の1919（大正８）年２月，倉敷紡績や中国銀行を経営する岡山県倉敷町の実業家・大原孫三郎により設立された。同じ年の12月，内務省の音頭で政府と財界の出資により，財団法人協調会が設立されている。この協調会が収集した図書・資料は第二次世界大戦後，法政大学図書館に「協調会文庫」として移管され，現在は当研究所に収められている。ちなみに協調会が1946年6月の解散まで収集した雑誌は，日本語雑誌が453，外国語雑誌が282タイトルであった。向坂文庫は，日本語雑誌だけで協調会のそれをはるかに上回っている。向坂文庫の場合，すべてきちんとバックナンバーが揃っているわけではないが，とにかく一個人の雑誌コレクションとしては想像を絶する多さであろう。

さて，向坂文庫の日本語雑誌を特徴づけるのは，その収集雑誌がきわめて広範囲に及んでいることである。大学・研究所の学術雑誌，官公庁・企業の調査・広報誌をはじめ，政治，経済，社会，労働，文学，科学技術，歴史，経済・経営，教育，宗教，美術などあらゆるジャンルにわたっている。しかし，向坂文庫における日本語雑誌の最大の価値は，日本の社会主義運動や政党・政治団体，労働組合，農民団体など社会運動団体の機関誌を豊富に収めていることである。これらの雑誌は，分量的に多いだけでなく，大原社研や国立国会図書館にも所蔵されていないものが目立って多い。ここでは，社会運動団体の機関誌を中心に紹介する。

明治期の雑誌で何といっても“目玉”となっているのは，新聞と同様に堺利彦旧蔵の「大逆文庫」の雑誌である。まず，1887（明治20）年１月，徳富蘇峰が“平民主義”をかかげて民友社から発行した社会評論を主とした総合雑誌『国民之友』と，1892年９月堺が自ら創刊し編集を行った『家庭

雑誌』をあげておこう。前者の『国民之友』は，三宅雪嶺が発行する国粋主義雑誌の『日本人』に対抗して各界の進歩的思想家を結集し，国民生活の近代化を唱え，イギリス議会政治や社会主義思想を紹介するなど革新の論陣をはっていた。だが残念なことに，なぜか創刊号だけがない。後者の『家庭雑誌』は，堺が「家庭の中より漸々に社会主義の理想を発達せしめる」目的で創刊したものである。この『家庭雑誌』は，合本されて保存され，その第一冊の表紙裏には堺の号である「枯川」の丸印と「平民社蔵」という３センチメートル四方の蔵書印が並んで押してあり，歴史の重みが感じられて興味深い。

さらに「大逆文庫」の雑誌としては，1906年３月，これも堺利彦が創刊した『社会主義研究』がある。この雑誌は日本で最初の社会主義研究誌で，創刊号に『共産党宣言』の全文を載せ，第２号で無政府主義運動を特集するなど，世界の社会主義運動における最新の動向をこまかく紹介し，日本社会主義運動にも大きな影響を与えた。なお，各号の主要な論文にかなりのアンダーラインや欄外への書き込みがあり，堺自身のものか，向坂のものかはわからない。

「大逆文庫」以外の社会主義関係雑誌としては，1900年10月，幸徳秋水が無政府主義者の立場から片山潜・田添鉄二らの「議会政策派」を批判する目的で創刊した『東京評論』と，1905年11月，石川三四郎・安部磯雄らがキリスト教社会主義運動の機関誌として創刊した『新紀元』がある。後者については，明治文献資料刊行会より復刻版が出ているが，いずれも原本を見るのは筆者にとって初めてのことであった。

また，1888年５月に平民社から発行された時事評論・文芸誌の『社会燈』がある。ここでいう平民社とは，『万朝報』を退いた堺や幸徳らが1903年10月に社会主義結社として結成したそれではない。『社会燈』は，自由党の星亨らが創刊した『自由燈』（1884年５月創刊，のち『燈新聞』と改題）が1886年に廃刊したのち，これに批判的な同党左派の有志が大阪府の東区に平民社を設立して発行した時事評論・文芸誌であった。この『社会燈』は，時の黒田清隆内閣から激しい弾圧を受け，わずか１年３か月の間に『新社会燈』『第二社会燈』『第三社会燈』『日本社会燈』と４回も改題しながら発行をつづけ，さらに『不夜城』などの雑誌も創刊した。向坂文庫には，それぞれ発行された全部の号が合本され収められている。

このほか特筆される雑誌として，板垣退助の監修で学界・官界・財界の指導者が寄稿していた『社会政策』（1910年）や，河上肇が，田口卯吉の『東京経済雑誌』に対抗して創刊した『日本経済新誌』（1907年）がある。また，明治初期の時事評論誌『近時評論』（1876年）や，大石祝らの社会思想雑誌『思潮評論』（1904年），宮武外骨の『面白半分』（1906年）などもあるが，これらの雑誌は欠号も多い。

1917年（大正６）年のロシア革命につづく翌18年の米騒動は，“民衆の時代”の到来を告げる号砲となった。新聞・雑誌メディアはデモクラシーを高唱し，“冬の時代”に雌伏していた社会主義者たちは勇躍して活動を再開した。民衆は階級的自覚を高め，新しい社会主義運動の波が大きくうねった。向坂文庫の大正期の雑誌では，1912（大正元）年10月，大杉栄と荒畑寒村が創刊した労働者向けの文芸思想雑誌の『近代思想』（第１次）と，1915年９月に堺利彦が社会主義思想の啓蒙を目的に創刊した『新社会』，1918年1月に『近代思想』から手を引いた大杉栄が伊藤野枝と創刊した『文芸批評』をまずあげておきたい。いずれも堺利彦旧蔵のオリジナルの雑誌で，バックナンバー

にも漏れはない。

このうち『近代思想』は，1914年9月に第23号をもっていったん廃刊となり，翌15年10月に復刊された。この第２次の『近代思想』は，第１次のそれと性格を異にし，前年10月に大杉と荒畑が再刊した月刊『平民新聞』と同様に，サンジカリズムやアナーキズムの傾向を帯びていたため発行のたび発売禁止となり，1916年1月に第４号で廃刊を余儀なくされた。一方，『新社会』は，堺利彦主筆の文芸誌『へちまの花』（1914年１月）を改題したもので，売文社から発行され，1920年１月の第50号までつづいた。向坂文庫の『新社会』は，堺自身が愛蔵していたもので，『へちまの花』と合わせて製本され，巻ごとに「堺」の丸印と太字のペンで「堺用」とのサインが付されている。

なお，『新社会』は当初，堺の個人経営で発行され，のち荒畑寒村・高畠素之・山川均らの協力を得て共同経営となった。のち高畠は1919年に身を引いて『国家社会主義』を創刊し，これを機に堺らは1920年２月に『新社会』を『新社会評論』と改めた。この『新社会評論』は，同年８月に日本社会主義同盟が結成されたのを機に『社会主義』と改めて同盟の機関誌となっている。これらも堺利彦旧蔵のものである。

堺利彦・山川均・山崎今朝弥らが，1919年４月，平民大学から発行した『社会主義研究』も注目される。この『社会主義研究』は，他の社会主義グループに大きな影響を与え，1922年１月に田所輝明らが『前衛』を，市川正一らが同年４月に『無産階級』を創刊した。これらの３誌は，1922年７月に日本共産党が結成されたのを機に合併がはかられ，翌23年４月に新しく『赤旗』（セッキ）となった。この『赤旗』は第３号より『階級戦』と改題されたが，関東大震災後の社会主義運動に対する弾圧でわずか２号で廃刊を余儀なくされている。『赤旗』にしろ『階級戦』にしろ，向坂文庫のなかでも稀覯誌の部類に入るだろう。

このほか，大正期に展開された社会運動団体の機関誌としては，新人会の『デモクラシー』（1919年３月），新婦人協会の『女性同盟』（同９月），小牧近江・金子洋文らが1921年10月，秋田県・土崎で発行した『種蒔く人』，暁民会の『農民運動』（1922年９月），建設者同盟の『建設者』（1922年10月創刊，のち『青年運動』『無産階級』に改題），稲村隆一・黒田寿男らの『政治運動』（1924年４月），日本フェビアン協会の『社会主義研究』（同５月），政治研究会の『政治研究』（1924年９月）などがあり，バックナンバーもだいたい揃っている。

なかでも，プロレタリア文学運動の確立に中心的な役割を果たした小牧らの『種蒔く人』（種蒔き社刊）は特筆されよう。この『種蒔く人』には秋田雨雀，有島武郎，江口渙，アンリ・バルビュス，アナトール・フランスなども寄稿し，休刊をはさんで1923年９月までつづいたが，発行部数が200部と極めて少なかった。小牧らは１年後の1924年10月，関東大震災のさいの亀戸事件の犠牲者を追悼する臨時号『種蒔き雑記』を発行している。向坂文庫にはこの臨時号を含めてすべて収めている。向坂がどのような経緯でこの『種蒔く人』を入手したのか，筆者はまだ調査を試みていない。

研究所では向坂文庫を受け入れたさい，大正期の労働組合機関誌では，1923年６月におけるいわゆる総連合運動の決裂後，西尾末広・渡辺政之輔らがアナーキストの自由連合主義に対抗して発行した合同派の機関誌『労働組合』の発見を期待した。だが残念ながら，この『労働組合』は入っていない。あるのは，日本交通労働総連合（1920年５月）や全日本鉱夫総連合の『鉱山労働者』などである。

第一次世界大戦終結後，日本では社会問題に対する専門研究の重要性が官民において提起され，1919年2月に大原社研が，同年12月に協調会が設立された。向坂文庫には，『大原社会問題研究所雑誌』（1923年8月）をはじめ，戦間期における研究機関の学術誌はほとんど収められている。ここでは，協調会『社会政策時報』（1920年９月），内務省社会局『労働時報』（1924年２月），産業労働調査所『産業労働時報』（1925年８月）などをあげておこう。また，河上肇の個人研究誌『社会問題研究』（1919年１月）もあるが，この雑誌は堺利彦の旧蔵のもので，合本された各巻ごとに「堺」「彦」などの角印が押されている。

このほか，大正期の学術・総合誌としては，長谷川如是閑・大山郁夫らの『我等』（1919年２月），平貞蔵・荘原達ら社会思想社の『社会思想』（1922年４月），改造社『社会科学』（1924年６月）などをあげておきたい。また平民大学から発行された山崎今朝弥主筆・編集の『平民法律』（1920年２月），杉原三郎個人雑誌『社会主義倫理学研究』（1923年５月）なども注目される。『平民法律』は無料の法律相談ハガキを綴じ込んで発行した雑誌として有名であるが，向坂文庫のものは，読者からの質問のハガキも束として一緒に綴じ込まれている。

昭和戦前期の雑誌は113タイトルで，数としてそう多くはない。けれども，この時期は戦争とファシズムの時代で，社会運動は弾圧され，やがて「冬の時代」に入る。この時期の雑誌は，いずれも熾烈な出版検閲をおして発行された貴重な雑誌ばかりである。

恐慌勃発の年の1927（昭和２）年12月，日本共産党の戦略・戦術論に批判的なグループによって雑誌『労農』が創刊された。『労農』は，野呂栄太郎や山田盛太郎らの「講座派」と地代（高率小作料），経済外強制，賃労働の創出，明治維新政府の性格など，いわゆる日本資本主義の性格規定をめぐって激しく論争を展開した。向坂は，労農派のリーダーの一人として，猪俣津南雄，櫛田民蔵，大森義太郎，岡崎三郎らと『労農』その他の雑誌を通じて論陣をはったことは周知の通りである。この『労農』は，前年の３月に鈴木茂三郎，黒田寿男らが反福本主義と“中間派左翼の結集”を標榜して創刊した『大衆』を吸収して発行したもので，向坂文庫では，いずれのバックナンバーも完全に揃っている。

なお，『労農』は，1932年６月に第45号をもって廃刊し，翌7月にその後継誌として『前進』が創刊されている。“プロレタリアートの戦闘的理論雑誌”と銘打たれていたこの『前進』は，「労農派」の同人のほか，誌面を広く他の社会運動家にも開放していたが，当局により連続的に発禁の処置がとられ，1933年７月に廃刊となっている。これら向坂文庫の『大衆』『労農』『前進』は，向坂が，特別の感慨で保存していたものであった。

この『大衆』や『労農』に対して，日本共産党は，事実上その理論誌であった『マルクス主義』（1924年５月）を通じてその所説に反論し，福本和夫自身，個人雑誌『マルキシズムの旗の下に』（1926年５月）を創刊して自説を主張した。向坂文庫におけるこれらの雑誌に欠号はない。向坂は，講座派の理論誌『経済評論』も含め，労農派理論に対抗するこれらの雑誌を意識的に集めて研究を重ねていたのである。

労働組合や農民運動の機関誌にも注目されるものが多い。前者では，さしあたり統一労働同盟の『労働者』（1926年12月），大杉栄らアナーキスト運動の『労働運動』（第5次，1927年１月），日本労働組合総連合の『組合総連合』（1926年４月創刊，のち『労働運動』と改題），全国労働組合総連合

の『自由連合』（同6月），日本労働組合全国協議会の『工場』（1930年５月）などをあげておこう。このうち『労働者』は労働農民党の積極的な支持を旗幟に，評議会の指導者によって発行されていたもので，大原社研でも欠号が多く，収集に努めていたものであった。

後者の農民運動関係では，稲村隆一らの『無産農民』（1926年10月）や，稲村らが1926年12月に日本労農党を結成したのち，翌27年４月に創刊した『農民運動』，平野力三ら全日本農民組合同盟の機関誌『農民組合』（1926年５月），渋谷定輔ら農民自治会の『農民自治』（1926年４月）などをあげておこう。また『農民岡山』（1938年12月）など地方農民組合の機関誌や，農民運動とは必ずしも関係しないが『帝国農会』（1933年10月以降），全国産業組合青年連盟の『産青連雑誌』（1936年６月），倉敷労働科学研究所の『農業労働調査報告書』（1935年9月以降）などもある。

労働組合系の調査研究所や学術的団体の機関誌，またプロレタリア文化運動関係の雑誌が多いのも向坂文庫の特徴となっている。

まず，1924年３月総同盟の援助で産業労働調査所（産労）が設立され，高橋亀吉・猪俣津南雄・野呂栄太郎らが労働事情の分析にあたった。産労は，これらの調査・分析を『産業労働時報』で発表する一方，世界の社会主義運動の理論や動向を『インターナショナル通信』で紹介していたが，向坂文庫はいずれも収めている。なお『産業労働時報』は合本され，その表紙には「産業労働調査所」の角印が押され，また筆により「野坂参弐殿」と宛名が付されている。向坂がどのような経緯で入手したか謎であるが，主事が野坂参三であったことから，合本されたものは野坂旧蔵のものか，あるいは産業労働調査所の原本であったかもしれない。

また，1929年10月に産業労働調査所・国際文化研究所などが母体となってプロレタリア科学研究所が設立された。同年11月に創刊をみた機関誌『プロレタリア科学』は，国際文化研究所の『国際文化』を改題して発行されたものである。向坂文庫には，産業労働調査所の若手の所員らが創刊した『政治批判』（1927年２月），社会科学研究同人の『社会科学研究』（同），唯物論研究会の『唯物論研究』（1932年11月）などを含めて，ほぼ完全に揃っている。後者のプロレタリア文化運動関係の雑誌も実に豊富である。向坂の人脈や交遊のひろがりを示すものだろう。

1927年２月，日本プロレタリア芸術家連盟が分裂し，同年６月，青野季吉・蔵原惟人らが新たに労農芸術家連盟（労芸）を結成し，ひきつづき『文芸戦線』を機関誌にした。しかし蔵原・林房雄らは労芸の労農派よりの運動方針に反対し，この年11月に脱退して前衛芸術家連盟を結成し，翌28年1月に機関誌『前衛』を創刊する。この前衛芸術家連盟は1928年３月に全日本無産者芸術連盟（ナップ）と合同し，５月に機関誌『戦旗』を創刊した。他方，労芸の『文芸戦線』は，数次の分裂をへて，1931年１月に『文戦』と改題したが，32年５月にみずから解散した。これ以降，プロレタリア文学・芸術運動は，プロレタリア作家クラブ（機関誌『労農文学』）と左翼芸術家連盟（機関誌『レフト』）の結成をみ，両者は，1934年２月に合同して第２次の労農芸術家連盟を結成し，機関誌『新文戦』を発行している。

以上にあげた雑誌のほか，向坂文庫には，プロレタリア作家同盟の『プロレタリア文学』（1930年６月），“ルンペンプロレタリア文学”の確立をめざした雑誌『思想批判』（1930年10月）なども所蔵されている。

このほか，向坂文庫には旧帝国大学の紀要をはじめ，官庁や民間の学術誌も多数収められている。

後者の例として，日本経済研究所の『政治経済情勢』（1935年１月），企画院の『企画』（1938年１月），満鉄『満鉄調査月報』（1940年５月）などをあげておこう。これらの雑誌には「向坂正男」の印が押されているのが目立つ。向坂正男は向坂の実弟で，当時，企画院にあって満鉄に出向していた。正男は戦後，経済企画庁に入り，総合計画局長をへて，1966年に日本エネルギー研究所所長などを務め，日本のエネルギー政策をリードした。和書のうち経済関係の図書でも「向坂正男」印のものが多く見受けられ，向坂が譲渡を受けたのかもしれない。また2・26事件の前年，向坂が編集代表となって発行したものの，弾圧でわずか3号だけに終わった『先駆』（1935年６月）や，労農派の同人が中心となって創刊したサラリーマン向け人民戦線の啓蒙誌『サラリーマン』（1936年３月）などは，現在では稀覯誌の部類に入るだろう。なお『サラリーマン』は近年，復刻版も出され，あらためて高い評価を受けている。

戦後期のものでは，占領期に創刊・復刊した雑誌を中心に339タイトルの雑誌が収集されている。中心になっているのは，日本社会党の『社会思潮』（1947年４月）や日本共産党の『前衛』（1946年２月），社会主義協会の『前進』（1947年８月）など政党・政派の雑誌であるが，各単産と単位労組の機関誌，さらには交通労働研究所の『交通労働』（1946年）や政治経済研究所の『政経月報』（1949年）など，調査研究機関の刊行物も結構多い。このほか，大阪新聞社の『新生日本』（1945年），真日本社の『真日本』（1946年），政経春秋社の『政経春秋』（同），創元社の『青年文化』（同），農民社の『農民』（同），協同書房の『批判』（同）などがある。いずれも他ではなかなか見られないものである。

6　原資料

当研究所で“原資料”とは，チラシ，ビラ，声明書，通達，メモ，生原稿，会議録，報告書，名簿，写真，書簡，演説草稿，檄文，書籍代請求書・領収書，名刺，各種地図などをいう。向坂文庫の場合，さらに団体の会報や月報（「講座」出版などに付されている『月報』などを含む），政党・労働組合支部のニュース，さらに新聞スクラップ，抜き刷り，カレンダー，展覧会目録なども含む。本年３月，文庫目録の最終巻である『向坂文庫目録　Ⅴ　原資料』が刊行された。向坂文庫における原資料の全容について詳しくは同書をご覧になっていただきたい。

向坂文庫目録では，原資料については，１．戦前資料（資料目録・戦前の部），２．戦後資料（資料目録・戦後の部），３．抜き刷り，に分けられている。ここでは１と２についてのみ，簡潔に紹介する。

1937（昭和12）年12月15日，向坂は，いわゆる人民戦線事件により検挙された。向坂は翌38年９月30日まで玉川警察署に，のち東京拘置所に拘禁され，39年5月9日予審終結決定にともなって仮釈放された。１の戦前資料で注目されるのは，この向坂自身の人民戦線事件の裁判記録に関するものであろう。またベルリンの古籍商シュトライザントから戦前に寄贈を受けたといわれる，マルクスの娘・イェニー・マルクス，エリナ・マルクスにあてた書簡や，ラッサール，アウグスト・ベーベル，ベルンシュタイン，リープクネヒトら社会主義者たちの直筆の書簡も収められている。書簡は全部で14点にのぼっている。書簡は現在，貴重書庫の「金庫」に保管しているが，研究所ではこれらの書簡も立ち会いを条件に公開している。

これらの資料と並んで戦前資料では，堺利彦や山川均旧蔵の資料，多くは堺利彦の旧蔵資料と思われるが，日本労農党，日本大衆党，社会大衆党，東京無産党など無産政党関係のものや，日本農民組合，全国農民組合（主には総本部派）の資料が多い。当研究所では子息の鈴木徹三氏より鈴木茂三郎の旧蔵資料の寄贈を受け，現在，「鈴木茂三郎文庫」として整理をすすめている。堺と山川の旧蔵資料は，この「鈴木茂三郎文庫」の資料と重複するものもあるが，向坂文庫にしかない資料が多々あり，相補う形になっている。

この戦前の原資料で特筆されるのは，『社会党に関する調査』（1908年８月）である。これは，1906年２月に日本で最初の社会主義政党として結成された日本社会党および役員の片山潜，堺利彦や幸徳秋水などの動静を探ったもので，堺利彦旧蔵のものである。また1920年12月結成の日本社会主義同盟の名簿もあり，これらはとくに貴重であろう。

戦前原資料の特徴の一つに，書簡類があげられる。向坂逸郎には内外に多くの友人・同志・同僚・教え子がいた。堺利彦の山川均，荒畑寒村，馬場孤蝶，与謝野晶子や，岩波茂雄，三木清らの向坂宛て書簡は，筆者自身，興味をもって読み，いずれも深い感動に包まれた。さらに今回，研究所では若杉隆志，大野健一郎らが中心となって資料整理をすすめる過程で，堺利彦あての与謝野晶子の短歌なども新たに発見されている。たとえば，1930年2月20日，堺利彦が第17回総選挙に東京無産党から立候補したさい，晶子が寄せた，「大衆のため君の立つ喜びの證にすべき一票の無し…」との「堺先生に捧ぐ」と題する直筆の短歌なども発見されている。

ほかに，戦前の原資料では，当研究所にも所蔵されていなかった労農芸術家連盟や，左翼芸術家連盟に関する資料なども多数発見されている。

戦後の原資料では日本社会党本部，同支部資料，総評と加盟単産の炭労，国労，全逓，日教組などの組合資料，さらに向坂自身，その指導者として関係があった社会主義協会，労働大学，社会党を強化する会などの資料が断然，他を圧している。

このうち日本社会党資料では，1951年10月における第２次分裂後における左派社会党全国大会関係資料と，55年10月の統一回復後における全国大会，府県本部資料などが主なものである。社会主義理論委員会，国民運動委員会など向坂が委員となった機関資料，さらに1948年11月に社会主義政党結成促進協議会として設立され，翌49年10月に社会主義労働党準備会と改称された，いわゆる「山川新党」に関する資料もある。この「山川新党」について通説では，小堀甚二らが中心で，山川均や荒畑寒村にはあまり関係がないとされてきた。しかし，これらの資料を読むかぎり，かなりの程度関与していることがわかる。

現物資料では，無産者新聞社の『無産者新聞』（1928年２月）の発刊案内などのポスターや，研究所では適当な名前がないので「現物」と呼んでいるが，三池炭鉱労組と主婦会から，1984年11月に向坂へ病気見舞いとして贈呈された，寄せ書きを行った布地（赤旗）などもあり，興味深い。なお向坂文庫の図書・資料の整理については，『向坂逸郎文庫目録　Ｖ　原資料』をもってひとまず終わった。筆者は現在，この原資料編の書誌研究をすすめており，詳しくは稿を改めて本誌で発表することにしたい。

（よしだ・けんじ　法政大学大原社会問題研究所研究員）